

# 2025 年度 自己点検・評価報告書

経済学部評価分科会

2026 年 2 月

## 基準4 教育課程・学習成果

### 1. 学修に関するもの

学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。また、学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。

#### 【1】今年度の自己点検・評価の方針・改善計画

##### ① 学修成果の測定方法

※学部のアセスメントプランを活用した測定方法を検討ください。

学部の教育課程において、ディプロマ・ポリシーで掲げたラーニング・アウトカムズ (LOs) がどれだけ達成されているかを把握・評価するために、今年度も昨年度と同様に必修科目において、学生の学習成果を適切に把握及び評価しているかを測定する。今年度実施する科目は「ミクロ経済学」「マクロ経済学」「経済数学入門」「経済と歴史」「基礎統計学」である。具体的には各授業の最終回（またはそれに近い回）にアンケート調査を行い、各授業が LOs の中で「◎」に設定している項目（4項目の中で一番該当するとしている学習成果項目）について達成度を訊く。例えば「ミクロ経済学」でのアンケートでは以下のように問う。

質問：以下の能力を育成するために、この授業は役に立ちましたか？ 「経済学を用いて、社会現象を複眼的視点から論理的また統計的に理解・分析することができる」

選択肢：非常に役に立った、多少役に立った、あまり役に立たなかった、まったく役に立たなかった

##### ② 効果的な教育を行うための工夫（シラバス、授業形態、履修計画の指導等）

①に挙げた評価結果を学部の自己点検・評価委員会（経済学部評価分科会）および教務委員会で報告し、学部教育の改善に生かしていく。また、授業運営・教育方法等を工夫した優れた試みについては、学部 FD の中で発表の場を設け、学部の教員全体で研鑽や意見交換を行い、各々の授業の改善に役立てていく。

#### 【2】今年度の自己点検・評価結果

##### ① 学修成果の測定結果

経済学部では、各科目の到達目標をシラバスで明記し、B-以上の成績であれば、その到達目標が達成されたと考えられることを基準に成績評価を行っている。また、各科目の成績分布は教授会で公表し、大学で定められた成績分布の基準（95点以上 [A+]が上位 5%、85点以上 [A-以上]は 25%）に適合しているかを検討している。そのうえで同基準から乖離した成績分布がある場合には、試験レポートの難易度を適切に調整するように求められる。

さらに、経済学部では、学位授与方針をもとに、各科目で身に付けることができる能力・ラーニング・アウトカムズ（以下 LOs）を定め、かつそれを履修要項に明示している。このことによって、受講学生が各科目でどのような力を修得できるかを知ることができる。以下の表は、各主要科目で達成可能であるラーニング・アウトカムズ (LOs) をまとめたものである。◎は最も該当、○は該当すること

を意味する。学習するすべての学生が、ラーニング・アウトカムズ (LOs) を修めることができるように、科目が配置されている。

アセスメント項目／ディプロマ・ポリシー —(Learning Outcomes)	ミ ク ロ	マ ク ロ	経 数 入 門	経 歴	基 礎 統 計	IP	演 習Ⅰ ～ Ⅲ	演 習 Ⅳ
(1) 経済学を用いて、社会現象を複眼的視点から論理的また統計的に理解・分析することができる。	◎	◎	◎	○	◎		○	○
(2) 世界の多様性、および経済問題・社会問題の多面性を理解し、関連する知識と語学力を活用して適切な議論を行うことができる。			○	◎		◎	○	◎
(3) 経済学の学修を通じて、自らの行動を律し、また多様性を尊重し、他者と協働しながら、目標を達成することができる。							○	◎
(4) 経済問題・社会問題に取り組み、人々の平和と幸福の実現に向けて、経済学を用いて解決策を提案することができる。							◎	◎

注) 科目名の略称について ミクロ：ミクロ経済学、マクロ：マクロ経済学、経数入門：経済数学入門、経歴：経済と歴史、基礎統計：基礎統計学、IP：IP科目群

#### 各科目での成績分布と達成度

以下では、「ミクロ経済学」「マクロ経済学」「経済数学入門」「経済と歴史」「基礎統計学」での成績分布と、「◎」に設定しているラーニング・アウトカムズ (LOs) の項目について達成度を訊いた結果である。

#### ■ ミクロ経済学

- 成績評価の基準：中間試験 30%、定期試験 40%、宿題・小テスト等 30%
- 成績評価の分布：B-以上 56%、C, C+ 15%、D, D+ 21%、E, E+, N 9%
- アンケート結果：「経済学を用いて、社会現象を複眼的視点から論理的また統計的に理解・分

析することができる

非常に役に立 った	多少は役に立 った	あまり役にた たな かった	まったく役に た たな かった	総回 答数	履修 人数
68%	30%	2%	0 %	60	141

#### ■ マクロ経済学

- 成績評価の基準: 中間試験 30%、定期試験 35%、宿題・小テスト等 35%
- 成績評価の分布: B-以上 49%、C, C+ 15%、D, D+ 25%、E, E+, N 12%
- アンケート結果: 「経済学を用いて、社会現象を複眼的視点から論理的また統計的に理解・分析することができる」

非常に役に 立った	多少は役に 立った	あまり役にた たな かった	まったく役に た たな かった	総回 答数	履修 人数
56 %	43 %	1 %	0 %	88	136

#### ■ 経済数学入門

経済数学入門の授業では、数学的な素養に関する学生間のバラつきが大きいことを踏まえ、クラスにおける学生の理解度の差を極力揃えるために、事前のプレイズメント・テストを通じてクラス分けを行っている。

- 成績評価の基準:
  - 【経済数学入門 B】 中間試験 40%、定期試験 40%、宿題・小テスト等 20%
  - 【経済数学入門 A(上位クラス)】 中間試験 0%、定期試験 45%、レポート・小テスト等 55%
  - 【経済数学入門 A(下位クラス)】 中間試験 35%、定期試験 35%、宿題 30%
- 成績評価の分布:
  - 【経済数学入門 B】 B-以上 76%、C, C+ 15%、D, D+ 5%、E, E+, N 5%
  - 【経済数学入門 A(上位クラス)】 B-以上 66%、C, C+ 21%、D, D+ 6%、E, E+, N 8%
  - 【経済数学入門 A(下位クラス)】 B-以上 47%、C, C+ 18%、D, D+ 15%、E, E+, N 21%
- アンケート結果: 「経済学を用いて、社会現象を複眼的視点から論理的また統計的に理解・分析することができる」

科目名	非常に役に立った	多少は役に立った	あまり役にた たなかった	まったく役に たたなかった	総回 答数	履修 人数
経済数学入 門 B	68 %	32 %	0 %	0 %	34	41
経済数学入 門 A(上位)	54 %	43 %	3 %	0 %	63	86
経済数学入 門 A(下位)	35 %	57 %	4 %	4 %	23	34

#### ■ 経済と歴史

- 成績評価の基準：中間試験 35 %、定期試験 50 %、宿題・小テスト等 15 %
- 成績評価の分布：B -以上 68%、C, C + 20 %、D, D + 9 %、E, E+, N 4%
- アンケート結果：「世界の多様性、および経済問題・社会問題の多面性を理解し、関連する知識と語学力を活用して適切な議論を行うことができる」

非常に役に 立った	多少は役に 立った	あまり役にた たな かった	まったく役に たたな かった	総回 答数	履修 人数
59 %	37%	4 %	0 %	102	151

#### ■ 基礎統計学

- 成績評価の基準：中間試験 0%、定期試験 35 %、レポート 25%、宿題・小テスト等 40%
- 成績評価の分布：B -以上 69%、C, C + 22 %、D, D + 8 %、E, E+, N 7%
- アンケート結果：「経済学を用いて、社会現象を複眼的視点から論理的また統計的に理解・分析することができる」

非常に役に 立った	多少は役に 立った	あまり役にた たな かった	まったく役に たたな かった	総回 答数	履修 人数
61%	37%	1 %	0 %	75	111

#### 分析および今後の課題

##### (1) 学習成果 (LOs) の達成状況に関する分析

- 理論系科目の達成度と満足度の乖離：「ミクロ経済学」「マクロ経済学」において、学生アンケ

ートでは98～99%（非常に・多少の合計）が「役に立った」と肯定的に回答している一方、到達目標（B-以上）を達成した学生は50%前後にとどまっている。学生は内容の重要性を認識しているものの、客観的な習得レベルの向上には依然として課題がある。新学部での授業時間半減に伴い、短時間で効率的な知識定着を促すためのICT活用やSA支援の重要性がより高まっている。

- **習熟度別クラス編成の成果と限界：**「経済数学入門」では、上位クラス（BおよびA上位）で高い目標達成率（66～76%）を維持しているが、下位クラスでは47%に留まり、基礎層への一律的な教育の難しさが示されている。
- **歴史・統計系科目の現状：**「経済と歴史」および「基礎統計学」では、目標達成圏（B-以上）の学生が約7割に達しており、学生の主観的評価（満足度）と成績評価による客観的な達成度が概ね整合している。

## (2) 新学部「経済経営学部」への改編に伴う今後の対応

2026年4月の新学部（経済経営学部）発足に伴い、教育資源の最適化と質の保証を目的に、以下の通りカリキュラムを再編する。

- **ミクロ経済学・マクロ経済学：**
  - 新学部では、ミクロ・マクロの内容を現行の半分に凝縮し、時間数も半減させる。
  - 現行の「ミクロ経済学」「マクロ経済学」の枠組みは、経済学部において主に編入生および再履修生を対象としたクラスとして存続させ、効率的な知識習得を目指す。
- **「経済と歴史」：**
  - 「経済と歴史」は新学部のカリキュラムでは提供されない。歴史系の科目は2年次からの経済学史や日本経済経営史などが提供される。
  - 現行の「経済と歴史」は、経済学部において主に編入生および再履修生を対象としたクラスとして存続させ、効率的な知識習得を目指す。
- **統計学教育の分割・高度化：**
  - 「基礎統計学」は2027年度より新学部生向けの科目として名称を変更する。
  - 現在の内容を「前半・後半」の2つの授業に分割して提供することで、これまで指摘されていた学習内容の密度を調整し、より確実な定着を図る。
- **経済数学の選択科目化と対象層の明確化：**
  - 「経済数学入門」は、新学部では必修科目から除外する。
  - 現行のレベル別クラス編成は廃止し、上位・中位層をターゲットとした1つの科目として提供することで、より高度で専門的な経済経営分析への橋渡しを強化する。
  - 一方、現行の「経済数学入門A（下位クラス）」については、経済学部において主に再履修生を対象としたクラスとして存続させ、効率的な知識習得を目指す。

## ② 効果的な教育を行うための工夫（シラバス、授業形態、履修計画の指導等）

基礎学力の多様化や、同一授業内における学生の学習能力の差に対応し、学生が自発的に学習を進め

られるよう、以下の工夫を講じている。

### (1) ICT を活用したレベル別達成度評価（マイクロ経済学中級）

学力層の多様化に対応し、能動的な学習を促すため、同一クラス内に居ながら ICT を活用して個々のペースで学習を深めるシステムを導入している。

- **段階的な問題演習と自動評価：** 学生は授業内で Google Forms を用いて順次問題を解き、クリアすると次のレベルの問題へ進む形式をとっている。
- **成績評価との連動による動機付け：** クリアした最終的なレベルによって成績評価が決定する仕組みを構築している。これにより、学生は現在の自身の立ち位置と目標とする成績を客観的に把握しやすく、主体的な学習継続に繋がっている。
- **厳正な試験運用の担保：** オンライン環境下での公平性を保つため、試験監督ソフト (Quilgo 等) の導入や、数百問のプールから無作為に問題を出題する機能を活用し、客観性と信頼性の高いアセスメントを実施している。

●

### (2) 学習習慣の定着と再挑戦の機会提供（マクロ経済学）

試験直前の詰め込み学習ではなく、日々の積み上げを評価に反映させるため、シラバスおよび評価設計の最適化を行っている。

- **リスキングを支援する宿題再挑戦制度：** 宿題の得点が低かった学生や未提出者に対し、試験前に Google Forms で再挑戦できる期間を設けている。解説を聴いた直後の解き直しを促すことで、成功体験を通じた理解の定着を図っている。
- **評価比重の戦略的配分：** 予習や小テストの比重を高める一方で、試験の比重を抑えるなど、継続的な学習が成績に結びつきやすい設計としている。

●

### (3) SA（スチューデント・アシスタント）による多層的支援

学生間の能力差を埋め、きめ細かな指導を実現するため、SA を教育設計の核として活用している。基礎科目において SA を増員し、学生の習熟度に応じた対面での学習相談やグループ学習のサポートを行っている。

## 2. 教育課程に関するもの

教育課程の編成・実施方針に基づき、学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

### 【1】今年度の自己点検・評価の方針・改善計画

#### ナンバリング、ディプロマ・ポリシーと開講科目・成績の照らし合わせ

経済学部では 2023 年度にカリキュラム改訂を実施し、2025 年度は 3 年目にあたる。まず、ナンバリング、ディプロマ・ポリシー (DP) と開講科目についてまとめる。本学部の DP は 4 つの学修成果 (Learning Outcomes: LOs) から構成されている。各 LOs と強く関連する科目数、および科目レベル別の内訳は以下の通りである。

L0s1：経済学を用いて、社会現象を複眼的視点から論理的また統計的に理解・分析することができる。

・関連科目数：52 科目

・特徴：300 科目レベルに多く、専門性の高い分析能力を養う科目が中心。

L0s2：世界の多様性、および経済問題・社会問題の多面性を理解し、関連する知識と語学力を活用して適切な議論を行うことができる。

・連科目数：35 科目

・特徴：100 科目レベルのインターナショナル・プログラム科目や演習系科目に多い。

L0s3：経済学の学修を通じて、自らの行動を律し、また多様性を尊重し、他者と協働しながら、目標を達成することができる。

・関連科目数：38 科目

・特徴：200 科目レベルと 300 科目レベルに多い。

L0s4：経済問題・社会問題に取り組み、人々の平和と幸福の実現に向けて、経済学を用いて解決策を提案することができる。

・関連科目数：41 科目

・特徴：300 科目レベルと 400 科目レベルに多く、問題解決能力と応用力を高める科目が中心。

次に 2023 年度と 2024 年度を合算した科目レベルごとの評定平均は以下の通りである。

100 科目レベル：評定平均は 3.04

200 科目レベル：評定平均は 3.52

300 科目レベル：評定平均は 3.26

400 科目レベル：評定平均は 3.70

500 科目レベル：評定平均は 3.75

上級レベルになるほど評定平均が高くなる傾向が見られる。これは、少人数での演習科目の割合が増加することや、学修意欲の高い学生が上級科目を履修することなどが影響していると考えられる。

今年度も引き続き、学部教務委員会および教授会において、科目・担当教員ごとに成績分布の妥当性をチェックし、教育の質の維持に努める。また、2026 年度に予定されている経済学部と経営学部の統合に伴い、新しいディプロマ・ポリシーを設定し、それに準拠した科目やナンバリングを適切に実施していく。

## 【2】今年度の自己点検・評価結果

### ナンバリング、ディプロマ・ポリシーと開講科目・成績の照らし合わせ

教務委員会および教授会において、科目・担当教員ごとに成績分布の妥当性を検証した結果、改善を要する科目はなかった。

また、2026 年度開設の「経済経営学部」における新たな教育目標および DP を策定し、それらに沿ったカリキュラム編成とナンバリングの確認を完了した。設置届出申請においても「指摘事項なし」との評価を得た。次年度の履修要件作成にあたり、各コース・モジュール・科目と L0s との関連性について、執行部および担当教員間で最終確認を行った。

### 3. 就学状況

#### 【1】2025年度の自己点検・評価の方針・改善計画

##### ① 学籍異動の状況（卒業、休学、退学の状況など）

経済学部には、留学する学生が多いという特色があり、それに伴い5年間で卒業する学生が例年多い傾向にある。卒業率を見ると、例えば、2020年度生の経済学部における4年（48か月）卒業率は56.0%で、全学の71.2%より低かったものの、5年卒業率では89.0%となり、全学平均の88.9%と同水準であった。また、2021年度生の4年卒業率は63.0%で、全学平均の70.2%と比較して低い水準であった。

次に、休学者数については、2024年度生（現2年生）の休学者の割合は0.8%で、全学平均と同じ水準であった。しかし、3年次以降は留学や卒業時期の調整のため、全学平均より高くなる傾向にあった。なお、2020年度から2025年度までの退学者の割合は4.1%で、全学平均の4.0%と同水準であった。

学習指導については、以下の3つのアプローチを継続的に実施していく。

1. 「My Map」の継続的な推進 全学で1年次1月に実施する「Soka Generic Skill (SGS) テスト」の結果を踏まえ、2年次春学期から夏休み、および春休み期間を中心に、学生自身が今後の学習計画を立てることに取り組んでいる。経済学部では10年以上の実績があり、全学生に配置されたアドバイザー教員が助言を行っている。

2. 成績不振学生へのフォロー体制 セメスターGPAが2を下回った学生には、アドバイザー教員による個別面談を実施している。さらに、3期連続や通算4期以上の成績不振学生に対しては、学部長または副教務部長が学部教務委員とペアを組んで個別面談を設けている。また、各授業においてオフィスアワーの積極的な活用を促したり、オープンチャットを活用して気軽に質問できる環境を整えたりするなど、学部全体で学生のフォローに取り組んでいる。加えて、多様な学生に対する支援についても、教授会前の学部ミニFDや冬休み期間中の学部FDで積極的に議論している。

3. 学業へのエンカレッジ策 学生の努力を称えるため、年間GPA3.5以上の学生（最低単位数あり）を対象とした「成績優秀者パーティー」を年1回実施している。例年、約100名の学生が対象となっている。

#### 【2】今年度の自己点検・評価結果

##### ① 学籍異動の状況（卒業、休学、退学の状況など）

学籍異動の確定前であるため、学習指導を中心に評価を行う。

第1の「My Map」の継続的な推進については、全学で1年次1月に実施する「Soka Generic Skill (SGS) テスト」の結果を踏まえた「SGS強化ワークショップ」を昨年4月に2度にわたり実施し、受講対象者の9割以上が参加した。さらに、2年次春学期から夏休み、および春休み期間を中心に、アドバイザー教員によるMy Mapに関するアドバイスをを行った。

第2の成績不振学生へのフォロー体制については、セメスターGPAが2を下回った学生には、アドバ

イザー教員による個別面談を実施している。さらに、3期連続や通算4期以上の成績不振学生に対しては、学部長または副教務部長が学部教務委員とペアを組んで個別面談を設けた。また、オフィスアワー等を活用しての授業に対するフォローを行った。

第3の学業へのエンカレッジ策については、経済学部・経済学会共催で昨年6月に成績優秀者パーティーを実施した。

#### 4. 改善計画

##### 【3】今年度の点検・評価に基づいた改善計画

###### ① 短期計画（アセスメント実施後1～2年の期間で実現可能な改善策）

学修成果達成状況についての分析の仕方や対象科目について検討する。またラーニング・アウトカムズについて、履修要項と各科目シラバスの整合性についてチェックをする。さらに各科目のラーニング・アウトカムズと到達目標については、各担当教員が受講生に周知するようにしていく。

###### 【3】中長期計画（アセスメント実施後3～5年の期間で取り組む改善計画）

<中長期計画（アセスメント実施後3～5年の期間で取り組む改善計画）>

2026年度からのカリキュラムは確定したが、アセスメントプランを策定し、それに基づいて計画的に改善していきたい。

#### 基準5 学生の受け入れ

##### 1. 学生の受け入れのための広報活動全般について、適切に実施しているか。

- ・オープンキャンパスにおける取組み
- ・授業体験や姉妹校との連携事業などの実施状況

##### 【1】昨年度の自己点検・評価で課題となった事項および今年度の方針・改善計画

2022年度入試より、入学定員を連続して大幅に下回る状況となった。そこで、2023年度入試からは志願者増加を目指し、以下の取組みを実施した。

- ・2023年度から開始した新プログラム「S-Cubeプログラム」の広報
- ・学部ホームページ（HP）の刷新
- ・オープンキャンパス等での積極的な周知

その結果、2025年度の入学者は定員190名に対し144名となり、2023年度および2024年度の120人台から増加した。

昨年度の自己点検・評価報告書で策定した改善計画の「短期計画」では、2026年度に統合される経済経営学部に向けた設置準備室を軸に、ワーキング・グループを設置し、検討することを掲げた。具体的には、教育プログラム、英語プログラム、広報活動、ヒューマニスティック・リーダーシッププログラム等のワーキン・グループを設け、魅力的な教育課程の構築と、受験者層に分かりやすく伝えるための広報活動を工夫する。

今年度は、この改善計画に基づき広報活動を展開していく。具体的には、2026年度からの学部統合と新プログラムについて、オープンキャンパスや学園連携プログラム、ホームページ、動画などを活用して説明し、新学部の魅力を効果的にアピールしていく方針である。

## 【2】今年度の取組みに関する点検・評価結果

- ① 学部ホームページ(HP)の刷新については、学生の留学体験の記事やゼミ合宿等の報告も充実させた。また、S-Cubeプログラムについては、オープンキャンパスについてアピールするとともに、学部ホームページの見え方等についても工夫した。2026年度開設予定の経済経営学部のホームページについても内容を更新し、その特色についてわかりやすく紹介した。
- ② オープンキャンパスの体験授業において、経済経営学部についてわかりやすく伝えるよう努めた。また、東西の学園については、新設の経済経営学部の理解が深まるようにした。創価高校からの要望を受け、2025年5月には3年生向けの経済学部説明会を行うとともに11月には保護者会でも説明を行った。
- ③ 2025年9月よりワーキング・グループ体制から、経済経営学部の委員会体制に移行した。広報については「広報委員会」とし、広報活動全廃について対処することになった。
- ④ こうした広報活動の成果もあり、年内入試において入学定員を超える志願者数があった。とくに創価学園推薦入試の志願者が多くいた。

## 【3】今年度の点検・評価に基づいた改善計画結果

<短期計画（アセスメント実施後1～2年の期間で実現可能な改善策）>

2026年度入試で好調な経済経営学部の志願者数をどう維持できるかが課題である。2026年度の経済経営学部に向けて、新設した英語プログラム(GLOBE)委員会、ヒューマニスティック・リーダーシッププログラム委員会、HOPE委員会で充実したプログラムをはかるとともに、広報委員会で受験者・保護者により分かりやすく伝えるよう取り組んでいきいく。

<中長期計画（アセスメント実施後3～5年の期間で取り組む改善計画）>

更新回数を増やし、適切な情報をスピーディーに提供できるよう体制を構築していく。

## 2. 合格者に対する入学前教育等を適切に実施しているか。また入学後の学生に必要な支援（リメディアル教育・初年次教育等）を実施しているか。

### 【1】昨年度の自己点検・評価で課題となった事項および今年度の方針・改善計画

昨年度、大学全体として数学と英語の入学前課題が年内入試合格者に課される中、経済学部としては、学部の基礎科目で使う数学の内容に特化した課題を独自に課してきた。また同時に推薦図書一覧を発信し、入学前の高校生に学部での学びへの興味を深めてもらえるような導入の本を紹介した。入学後は初年次セミナーを通じ、大学生に必要とされる学習態度・スキルを身につけられるよう工夫す

るとともに、数学については必修の「経済数学入門」の授業をレベル別に開講し、学生それぞれに合ったペースで数学力を磨くことができるシステム取り入れている。

なお入学前教育に関して例年課題として残るのが、課題に取り組みずに入学する学生が一定数存在することであった。昨年は、年内入試合格者への入学前ガイダンスにおける SA を雇用するための予算が大学に組み込まれることとなり、経済学部でも合格者を小グループに分けて現役の SA がきめ細かくサポートする体制を敷いた。このため、昨年度は入学前課題へのログイン率が 100%（一昨年は 95.1%）となり、最後まで課題を完遂した達成率も前年を上回った（英語 87.7%、数学 86.5%）。また学部独自の数学課題に関する質問を受け付ける SA によるサポート体制も敷いた。この数学コンサルティングを利用した学生からの反応は良かったが、参加者が少なく、あまり周知できずに実施してしまった点が課題として残った。

今年度は、2026 年度よりスタートする経済経営学部の合格者に向けた入学前教育という新しい試みとなる。経営学部のチームビルディングのノウハウを活かしながら、より現役生が SA として活躍できるようにサポートしていく。また、入学前課題を提供する業者が変わり、英語・数学に加えて国語も導入される。各学問分野に合わせた方で単元を選ぶことが可能となるため、学部独自の課題は提供せず、入学前ガイダンスの内容を充実することに集中することができる。また、今年度より学園推薦入試の合格者を対象とした入学前ガイダンスも始まるため、従来の年内入試合格者向けのガイダンスと連動させながら、経済経営学部で学ぶことへの興味を深める場となるよう工夫していく。

## 【2】今年度の取組みに関する点検・評価結果

入学前教育については、経営学部と合同でガイダンスを行った。具体的には、年内入試合格者を対象に、各入試の合格発表の数週間後に「合格者交流会」を同内容で 2 回（2025 年 11 月 29 日、2026 年 1 月 20 日）、そして「合格者ガイダンス」を 3 回（2026 年 2 月 1 日、2 月 15 日、3 月 7 日）に実施した。いずれも ZOOM で実施し、在校生に SA として参加してもらった。前者の「合格者交流会」では、SA がブレイクアウトセッションで少人数の合格者グループを担当し、質疑応答や仲を深めるための懇談会を進行してもらった。現役生の目線で合格者がどのようなサポートや情報を必要としているのかを考え、それぞれ合格者が安心できるよう工夫していた。後者の 3 回の「合格者ガイダンス」では、大学生として知っておくと有益な情報を散りばめたクイズ（SA 作成）や、体験授業とディスカッション、そして「自分の好き展」を行い、毎回 SA のファシリテートによるグループディスカッションを入れることで、合格者も発言しやすい場を提供した。

また今年度から始めて学園推薦生対象の合格者ガイダンスも別途行うこととなり、計 6 回 ZOOM にて実施した。第 1 回目（2025 年 12 月 8 日）は学部プログラムの説明、第 2 回目（12 月 18 日）は学部生とのグループ懇談会、第 3 回目（2026 年 1 月 28 日）は学部体験授業、第 4 回目（2 月 4 日）はバーチャル留学体験、第 5 回目（2 月 7 日）は卒業生との進路懇談会、第 6 回目（2 月 18 日）は自分の好き展という、多種多様な内容で実施した。特に第 3 回目の学部体験授業では、敢えて専門分野が関連している経済・経営それぞれの教員が担当し、経済経営両面からの学びの意味を考えてもらう場となった。第 4 回目はケニア、スイス、韓国へ留学した学生の体験談、第 5 回目は経済経営それぞれの卒業

生 4 名が大学時代のことから現在の仕事内容に至るまでの体験を語り、合格者からも多くの質問が寄せられた。

以上の入学前教育を通し、学生の情報格差を埋め、入学に際する様々な不安要素を取り除く機会を提供できたものとする。

入学後のリメディアル教育では、レベルに応じた数学の必修科目（経済数学入門 A, B）の中で、SA が授業に参加し、学生が質問し易い環境を提供した。また、授業外での SA によるコンサルティングも引き続き提供している。初年次セミナーでは、基本的なアカデミックライティングや、LTD を使った学習を通して大学での学びにスムーズに入っていけるよう工夫している。今年度も昨年度同様、授業課題の把握方法など、基本的な情報取得のノウハウについて SA に説明してもらう時間を設けた。このような入学後の学生支援は、ある程度充実してきてはいるものの、学部生アンケートでは「情報格差」を問題としている学生も多く、今後も工夫が必要であると思われる。

### 【3】今年度の点検・評価に基づいた改善計画結果

#### <短期計画（アセスメント実施後 1～2 年の期間で実現可能な改善策）>

経済学部・経営学部合同の入学前教育は今年度が初めてであったため、今回の SA や参加者のフィードバックも集めながら、来年度の入学前教育に活かしていく。

初年次教育は、2026 年度からは経済経営学部がスタートし、Humanistic Leadership Program(HLP) という名のもと、新しい内容に生まれ変わる。今まで経済学部の初年次教育であまり力を入れることができなかったチームビルディングや人間主義リーダーシップといった項目に着眼した内容となる予定で、更なる発展が期待される。

#### <中長期計画（アセスメント実施後 3～5 年の期間で取り組む改善計画）>

2026 年度春学期から始まる HLP I（必修科目）につづき、秋学期には HLP III が、2027 年度春学期には HLP III がスタートする。この一連の流れを通し、人間主義のリーダーとして社会に羽ばたいていけるよう、振り返りを行いながら改善を重ねていく。

### 学生の意見聴取

主として以下の観点を参考に、今年度の点検・評価および今後の方針を記入してください。

- 履修、授業、LOs に関すること
  - ・ 全学の教育目標や 3 つのポリシーを認識していたか
  - ・ 履修科目を決める際に、その科目のラーニング・アウトカムズを意識したか
  - ・ 自身の学びを自己点検しているか  
(履修科目のラーニング・アウトカムズの修得や、授業アンケートの自己評価について)
  - ・ 今後、DP に掲げる能力を身に付けることが期待できるか
- 昨年度の学生からの意見聴取を受けて取り組んだ事項について
  - ・ 学生からの意見を受けて検討および実施した取り組み等のフィードバック

● 学生生活全般に関することや機構として意見交換した事項

**【1】昨年度の自己点検・評価で課題となった事項および今年度の方針・改善計画**

昨年度の自己点検・評価で挙げた課題は、3つのポリシーに関する学生の認識が薄く、浸透していないという点であった。学生自治会との連絡協議会にて意見交換を行う中で、特に各専門科目のラーニング・アウトカムズが周知されていないという指摘を受けた。また、今年度の学生自治会との意見交換の中で挙げた課題は、今年度から学生のポータルサイト上にラーニング・アウトカムズに関する学習成果が可視化されることとなったが、見方が分からずに活用していない学生が多いという点であった。

上記の改題に対する、今年度の方針・改善計画は以下のとおりである。

- ① 3 ポリシーの意義と共有、またカリキュラムの改善のために、各学期のガイダンスにおいて DP、LOs について確認するようにする。また「初年次セミナー」においても、授業時に学ぶ機会を設定する。
  - ②各授業のガイダンス等においても、その科目で獲得できるラーニング・アウトカムズについて説明をするなどを通し、学生のラーニング・アウトカムズへの意識を深める。
- 【4】** 学生自治会との綿密な協議を通し、効果的な周知方法を探るなど、共同作業の枠組みを構築する。

**【2】今年度の取組みに関する点検・評価**

今年度行った学生自治会との意見交換で明らかになった課題や要望は以下の通りである。

学生からの DP, LOs に関する意見

1. 大学全体の 3 ポリシーの認識について

3 ポリシーを知らない学生が多い。大学のホームページに記載されているが、その場所が分かり辛い。大学入試で面接を受ける学生は 3 ポリシーを認識している場合が多いが、それ以外の学生は認識していないことが多い。

また、ガイダンスや初年次セミナーといった全員をカバーできる場で DP, Los に関する内容の発信をすることは有益であるが、その際に「なぜ Los が必要であるのか」についても説明するべきである。

2. 授業を履修する際に LOs を意識しているか

あまり意識できていない。但し、初回の授業内でシラバスの内容や履修目的を問うアンケートを実施する授業があり、その授業については LOs を意識することができた。

3. 自身の学びを自己点検しているか (LOs の習得、授業アンケートの自己評価)

授業アンケート結果のサイトには LOs の習得の度合いが数字で記載されているが、総合的な学習成果が分からない。創価大学生全体の総合結果が書かれているため、自己評価の指標になっていないのではないか。

4. 今後、DP に掲げるの能力を身に着けることが期待できるか

DP について学ぶ機会が増えれば、身につけている能力を具体的に自己理解することができると思うが、現状ではそのような機会がほとんどない。自分だけの LOs を可視化できるようなグラフがあれば良いと思う。

以上から、現状 DP、LOs の認知が進んでいないことが分かる。今後更なる取り組みが必要であると思われる。

なお、自治会が行ったポリシー研修会を受けて、今後の改善策として以下の意見が学生から寄せられた。

- ポリシーの説明の中に、学生だけでは理解が難しい表現がある（例：人間主義経済学は特に 1 年生にとって分かり辛い単語であるため、説明すべきである）
- 初年次セミナーや入学前後にポリシーについて説明があると良い
- ホームページのトップに記載すると目につきやすい

### 【3】今年度の点検・評価に基づいた改善計画

#### <短期計画（アセスメント実施後 1~2 年の期間で実現可能な改善策）>

学生との意見交換の場で、自治会が主体的に行おうと考えている DP や LOs の認知を広げるための対策案が示された。具体的には、引き続き以下の取り組みを進めることである。

- 各学期冒頭の履修相談の際に、DP や LOs について話す機会を設ける
- 実際に履修した授業と自分が身に付いたと感じるスキルを整理して説明する
- 求めるスキルと授業の内容をまとめた図を作成する
- オープンキャンパスでアドミッションポリシーの存在を訴える

また、上記の項目にプラスして、「授業ごとに得られる LOs が様々なので、どの科目でどの LOs を修得できるのかをもう少し分かりやすく学生に説明するべきである」との意見が学生から寄せられた。

MyMap 面談等で丁寧に説明していくこととする。

上記から分かるのは、履修を決める際に、学生が具体的に LOs を感じ取れるような仕組みが必要であり、またその際に文章だけでは伝わり難く、図などの視覚的な情報があると良いことが分かる。学部としても、学期はじめのガイダンスや初年次セミナーで、学生がよりイメージしやすい形で DP や LOs を伝えていく。

また、各専門科目の授業ガイダンスなどで LOs を学生に示し、学生の LOs の理解を深め、それを意識して授業に取り組むように促していく。

#### <中長期計画（アセスメント実施後 3~5 年の期間で取り組む改善計画）>

以下の改善策を引き続き実施していく。

My Map 面談等を通してアカデミックアドバイザーが学生に LOs を意識した科目履修を促し、4 年間・8 セメスターの履修と学修を通して、DP、LOs の実質化を図っていく。また、学生との定期的な協議と共同作業の枠組みを構築する中で、学生による検証と評価をもとにカリキュラムの改善策をたて、

カリキュラム改正時に実質化を図っていく。